

イザヤ書1章「背を向けた民」

1A イザヤの幻 1

2A 背く者たちへの裁き 2-31

1B 主を捨てた民 2-9

1C 育て親を忘れた民 2-3

2C 自らを傷つける民 4-6

3C わずかな生き残り 7-9

2B まことのいけにえ 10-20

1C 忌み嫌うささげ物 10-15

2C 悪の取り除き 16-17

3C 主による清め 18-20

3B 遊女になった都 21-31

1C 失われた公正と義 21-23

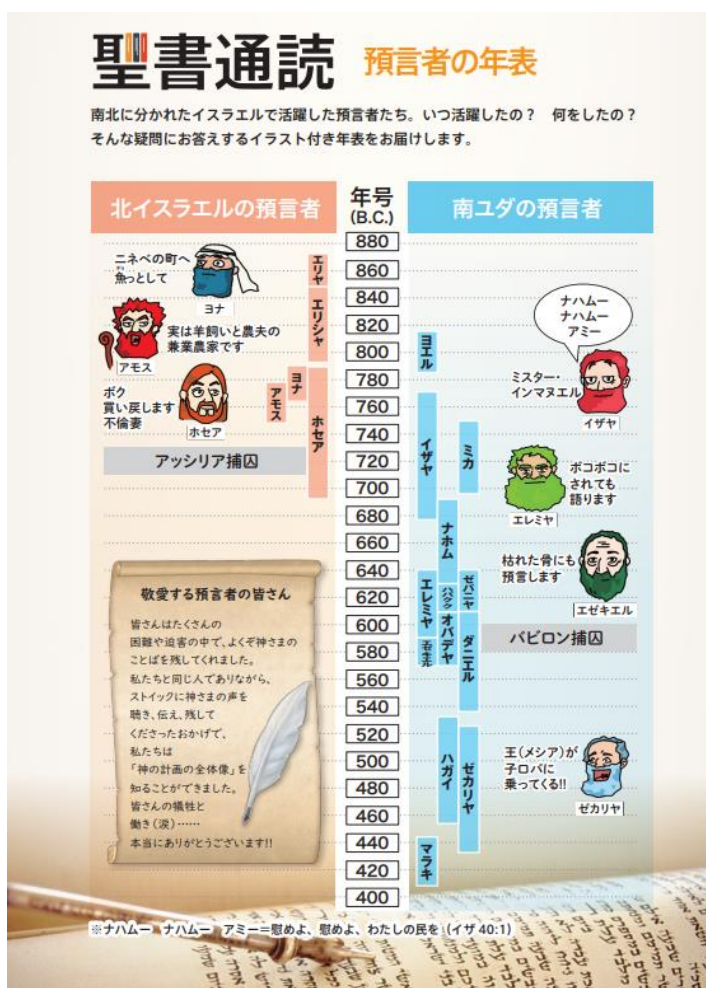
2C 主による精錬 24-27

3C 背く者の滅び 28-31

本文

イザヤ書の学びに、今日から入ります。旧約聖書で、預言書と呼ばれているものの初めの書であり、また、代表的な書です。イスラエルに、主はモーセによって律法を与えられました。それによって、申命記にあるように、主なる神との関係を、夫が妻と誓約を結ぶようにして、契約を結びました。しかし、その中で主から離れていき、その時に、主が数々の預言者を遣わしたというのが、多くの預言者の背景になります。

それぞれの預言者がいつ出たのかを示す、年表があるのですが¹、これを見ればお分かりのように、イスラエルが外国に捕え移されそうになる前に、主が多く遣わ



¹ BFP 発行、聖書通読。https://www.bfpj.org/pdf/readingplan_doc_202108.pdf

されているのが分かります。北イスラエル王国は、紀元前 722 年にアッシリアに首都サマリアが滅ぼされ、捕囚の民となります。その前に、エリヤやエリシャを始めとして預言者が登場し、アモスやホセアがいます。そして、紀元前 586 年に、バビロンが、南ユダ王国の首都エルサレムを破壊し、ユダヤ人を捕え移しました。その時に集中して、イザヤ、ミカ、エレミヤ、エゼキエル、ハバクク、ゼパニヤ等々、主が預言者を遣わしています。主に立ち返ってほしいと願われているのです。

イエス様が、ぶどう園の譬えで、このように言われたとおりです。「マタ 21:34-36 収穫の 때가近づいたので、主人は自分の収穫を受け取ろうとして、農夫たちのところにしもべたちを遣わした。ところが、農夫たちはそのしもべたちを捕らえて、一人を打ちたたき、一人を殺し、一人を石打ちにした。主人は、前よりも多くの、別のしもべたちを再び遣わしたが、農夫たちは彼らにも同じようにした。」預言者の言葉は厳しさを持っていますが、それは、彼らが悔い改めて、滅びることがないように、ほとぼしる愛から出てきたものなのです。

ところで、イザヤ書は、新約聖書で最も引用されている旧約聖書です。イエス様ご自身も、しばしばイザヤ書からの言葉を引用されました(例: マルコ 7:6-7)。そして、イザヤ書自体が聖書全体の救済、つまり救いのご計画を教えている書物であると言われています。「イザヤ」という名前が「救いはヤハウェのもの」という意味です。ヒゼキヤの時代、エルサレムがアッシリア軍に包囲されますが、主が一気に滅ぼされることによって、エルサレムをお救いになりました。救いは主によってくることをこれからユダは悟ります。

そして、後にバビロンに囚われの身となりますが、そこでバビロンをペルシヤの君キュロスが倒して、ユダの民を解放して、帰還させるという救いも体験します。そして、ついに主のしもべご自身、キリストがその罪の贖いによってイスラエルの民を救うことを預言します。それだけでなく、諸国の民もキリストを王として拝し、世界からやって来て、この地上が神の国になることを預言し、最後は、この地、この天そのものが全く新しくされる、新天新地の幻で終わります。救いはヤハウェのものです。そして私たちの生活における救いも、ヤハウェのものです。「ヤハウェは救い」という意味であるイエスの御名によって、私たちの内にも救いを成し遂げてくださるのです。

そして、イザヤ書全体を読まれた方は、その話の流れが 40 章から一気に変わることにご気づくはずで、1 章から、反逆するご自分の民に対する叱責、罪からの立ち返りを呼びかけているのに対して、40 章以降は、「慰めよ、慰めよ、わたしの民を。」と主がエルサレムに対して優しく語りかけているところから始まります。既にバビロンでの生活において、自分たちの罪によって痛めつけられた民に神が慰めを与えられるのが 40 章以降です。

そこで、1 章から 39 章が前半部分、40 章から 66 章が後半と分けすることができます。章を数えると前半が 39 章分、後半が 27 章分です。旧約聖書の数が 39 巻あります。新約聖書の数

27 巻あります。章や節は、ずっと後世に付け足したもので、初めからはないのですが、興味深いです。前半の 39 章分が、旧約聖書に色濃く出ている、律法に違反することによる呪い、裁きが書かれており、そこからの救いが書かれています。後半は新約聖書に展開されている、律法の完成者であられるキリストが、神の祝福を信じる者に与えられる慰めが書かれています。イエス様が公生涯を始められる時に、ナザレのシナゴークでイザヤ書を読まれましたね(ルカ4:17-21)。それは後半部分にあり、神の慰めでした。「貧しい人に良い知らせを伝えるため、主はわたしに油を注ぎ、わたしを遣わされた。」と読まれました。そして、「今日、この聖書のみことばが実現しました。」と宣言されました。

1A イザヤの幻 1

以上がイザヤ書の大まかな流れです。それでは本文を読んで、さらに歴史背景を説明してみましよう。

¹ アモツの子イザヤの幻。これは彼がユダとエルサレムについて、ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に見たものである。

イザヤ書を読む時に、ここに書いてある王たちの記録があります。列王記第二 15 章から 21 章まで、歴代誌第二 26 章から 33 章までに書いてあります。

この時に、イスラエルの民は約束の地に来てから約七百年が経っていました。そしてダビデによって王国がイスラエルに建てられてから約三百年が経っています。ダビデそしてソロモンによって、国は大きく強くなり、平和と繁栄が保たれていました。しかしソロモンが晩年主から離れてしまい、それで主は彼の国を、二つに引き裂くようにされたのです。

ソロモンの部下ヤロブアムが、彼の死後に反逆しました。ソロモンの息子レハブアムの時にヤロブアムのほうに十の北の部族が付いていき、それで北イスラエルと南ユダに分裂しました。それが紀元前 917 年のことです。ヤロブアムは金の子牛を造らせ、勝手に祭司も立てて、偶像礼拝の罪を犯させました。それが北イスラエルの国是になってしまったので、その後の王たちもヤロブアムの罪から誰も離れることができませんでした。ユダの王たちは、エルサレムに神が選ばれた宮があり、また祭司たちも神の選びによる者たちであり、霊的に逸れてしまったことがあるものの、主の目にかなったことを行なった王たちもいました。そのように、王たちの不従順のために、争いが起こりました。周囲の国々がこれまでは従属していたものが反発して独立したり、小競り合いの戦いをイスラエルに対してするようになりました。

けれども、そのような小競り合いの戦いなど、まるで無に等しくするような大きな国が、現われたのです。イスラエルまたその周辺国は、南に大国エジプトがいましたが、北から出てきたアッシリア

国の脅威に次第にさらされていくこととなります。ですから、アッシリアが北から攻めてきて、それでアッシリアに屈服するか、それとも南のエジプトと同盟を結ぶか？そして、周囲の国々と連合して集団的自衛権を行使するか？という選択が迫られました。しかし主の御心は、「わたしはシオンにいる。シオンにこそ救いがある。」というものでした。どの国々にも頼らず、主がアッシリアから救ってくださるという御心です。そして、ヒゼキヤの治世においてはバビロンも台頭しつつありました。後にヨシヤの時代に、カルケミシュの戦いでアッシリアがバビロンに敗れて、それでネブカドネツァルが現われ、今度はバビロンがユダの国に攻めてくるようになる、という状況です。

イザヤは、このウジヤの時代からヒゼキヤの時代まで預言をしていました。ウジヤが死んだのが紀元前 740 年で、その前から活動してヒゼキヤが死んだのが 686 年なので、大体 60 年から 70 年の間、預言をしていたこととなります。そして 2 節以降は、ウジヤの治世の時に預言したものとされます。

ウジヤはダビデとソロモンの治世以来、ユダが最も大きく、強くなった時代の王でした。歴代誌第二 26 章に書いてあります。彼は主の目にかなうことを行ない、その上、領土が広がり、農業も盛んになり、軍事的にも防備をしっかり行ない、兵力や武器も増強できました。このように強く、豊かな国になったのです。けれども、預言者というのは、神の御霊によって与えられた悟りがあります。人々の目には正しいことのように見えているところに、神はすべてを見通しておられて、人の心が主ではなく異なるところにあったのを預言者は示されていました。ちょうどそれは、イエス様がオリブ山から神殿を見ておられて、弟子たちはその荘厳な建物に驚いていたけれども、イエス様は、そこには実が結ばれていない生い茂った木しかなく、根こそぎ取られてしまうだろうというものを見ておられました。

私たちはしばしば、神から警告を受ける時に、「そんなはずはないでしょう。」と普通は感じてしまうようなことを神は言われます。けれども、警告しているのですから、私たちは大丈夫だと思っても、心に留め、耳を傾けなければいけないのです。

2A 背く者たちへの裁き 2-31

1B 主を捨てた民 2-9

1C 育て親を忘れた民 2-3

² 天よ、聞け。地も耳を傾けよ。主が語られるからだ。「子どもたちはわたしが育てて、大きくした。しかし、彼らはわたしに背いた。³ 牛はその飼主を、ろばは持ち主の飼葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らない。わたしの民は悟らない。」

主は、これから彼らの罪を明らかにされますが、法廷を想定しながら語られています。ご自身が原告、そしてイスラエルの民が被告です。証言台に、天と地を呼んでいます。つまり、天も見てい

るし、地上も見ているはずだ、と。申命記では、二人、三人の証人がいて、初めて事実と確認されるという律法がありますが、天と地という二者を証人に建てています。そして、イスラエルのしたことは明らかであることを教えておられます。

それは、「ご自身が造られ、育てられた者たちが、逆らってしまった。」ということです。家畜でさえ飼い主を覚えているのに、彼らは悟っていないということです。そして、これは育てられているからこそ、愛されているからこそ、かえって神から離れるという逆説的なことが起こっている、ともいえるのです。自分が恵みによって救われていて、神に愛されているということを思い起こし、その恵みと愛に留まらないで、そこから自分自身が離れていくという反逆です。ちょうど、放蕩息子が、父から離れて、遠い国にいった譬えに通じるものがあります。

2C 自らを傷つける民 4-6

⁴ わざわいだ。罪深き国、咎重き民、悪を行う者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。

神の民が主に背いていることを、徹底的に宣言しています。罪深い国だ、咎が重い民だ。悪を行っている者たちの子孫というのは、神の民なのに悪者たちと全く同じことをしている、ということです。自分は神の民だから、そのまま祝福され、救われるのだと居座ることはできないということです。主に留まっているからこそその、神の民であり、実を結ぶために私たちは選ばれました。

そして、主を捨てて、聖なる方を侮って、背を向けていると断じています。私たちは、自分が神に反逆していると考えerことは少ないです。グレッグ・ローリーは、高校生の時に伝道者から、「あなたは、イエスに従っているか、背いているかのどちらかなのだ。」と言われて、かなり焦ったそうです。自分はイエスに従っているわけではないが、まさかイエスに反逆しているとは思っていませんでした。中庸だと思っていたのです。

そして、今の時代、罪についてそれが神に対する反抗であることを忘れています。性格の弱さであるとか、つまずいてこうなったのだ、であるとか、いろいろな理由を付けます。けれども、私たちが真の魂の癒しを得るには、自分の肉が神に従っていない、神に反逆しているのだということを認めることです。ここに、「イスラエルの聖なる方」という神の呼び名がありますが、これはイザヤ書で数多く出てくる呼び名です。イザヤは、6章で主の御座の幻を見て、「ああ、私は滅んでしまおう。」と叫びました。御座にあるその聖さに触れたからです。私たちは、他の人と比べたら反逆ということは思わないでしょうが、聖なる神がおられて、この方に反逆しているのだということです。

⁵ あなたがたは、反抗に反抗を重ねてなおも、どこを打たれようというのか。頭は残すところなく痛み、心臓もすべて弱っている。⁶ 足の裏から頭まで 健全なところはなく、傷、打ち傷、生傷。絞り出

してもらえず、包んでももらえず、油で和らげてもらえない。

エレミヤ書など、預言書には、罪を犯すことを傷を受けているとして言い表しています。ゆえに、イエス様が十字架で肉体に傷を受けられた時に、その傷が罪を表しており、私たちのたましいが癒されるということになります。

しかし、私たちは神に背いて、神が頑固おやじのように怒って、それで鞭うって傷を受けているのではありません。そうではなく、自分で自分を傷つけていることをしているのです。神は最善を考えて、私たちに命令を与えておられます。その命令に従うことは、私たちが守られることであり、最も幸いになれることです。ところが、それから離れるのですから、自ら傷つけることになります。そして敵によって虐げられるままになるのです。主は、癒したいと願われています。けれども、その愛のゆえに、心を開かない者のその閉ざしている心を、無理やりこじ開けることはできないのです。

3C わずかな生き残り 7-9

⁷ あなたがたの地は荒れ果て、あなたがたの町々は火で焼かれている。土地は、あなたがたの前で他国人が食い荒らし、他国人に破壊されたように、荒れ果てている。⁸ しかし、娘シオンは残された。あたかも、ぶどう畑の小屋のように、きゅうり畑の番小屋のように、包囲された町のよう。⁹ もしも、万軍の主が私たちに 生き残りの者をわずかでも残されなかったなら、私たちがソドムのようになり、ゴモラと同じになっていたであろう。

6 節まで、イスラエルの民を一人の人間に喩えて語っておられましたが、ここは具体的です。このように国が荒れ果てている、町々が火で焼かれている。そして、他国人に食い荒らされています。しかし、であります。

しかし、ここ 8 節の「しかし」が、イザヤ書の特徴です。主が激しくご自分の民を責めておられますが、主は必ず回復を与えてくださいます。「残された」とありますが、「生き残りの者」とか「残りの民」という言葉が繰り返しイザヤ書では出てきます。主によって、主が私たちに時に与えられる懲らしめ、あるいは試練があります。それによって、私たちの内にある不純物が練り清められます。私たちの品性が練られます。ただ主のみに信頼する、そして主の救いのみを待ち望むようにされます。

そして主はこのようにして、残された者たちを通して働いてくださいます。イスラエルの民の中でも、ギデオンの戦いの時に、相手は 13 万 5 千人のミディアン人でしたが、3 万 2 千人いるイスラエル人のうち、わずか 300 人だけが残りました。しかし、その 300 人で 13 万 5 千人に対して主は戦ってくださったのです。同じように、イスラエルの国はアッシリアによって滅ぼされ、ユダも町々が全て倒れ、残りわずか、エルサレム、シオンだけになりました。アッシリアに取り囲まれます。けれど

も、この「娘シオン」のゆえ、主はアッシリア軍を滅ぼされるのです。

そして9節に大きな原則があります。主を敬う残りの人がいれば、その民全体を滅ぼさないという原則です。アブラハムがソドムとゴモラのための執り成しをしました。主は、正しい人が十人しかいなくても町全体を赦すと言われました。実際には十人もいませんでした。けれども一人の正しい人口のために、本人とその家族が町を出て行くのを見届けてから、火と硫黄で滅ぼされたのです。主は決して、正しい人と悪人をともに滅ぼすことはありません。

ですから、信仰によって義と認められた人たちがこの地上にある限り、神の怒りの現れである大患難が地上に下ることはないのです。「Iテサ 5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにはなく、主イエス・キリストによる救いを得るよう定めてくださったからです。」

2B まことのいけにえ 10-20

1C 忌み嫌うささげ物 10-15

¹⁰ 聞け。ソドムの首領たちよ、主のことばを。耳を傾けよ。ゴモラの民よ、私たちの神のみおしえに。

ソドム、ゴモラとは、ユダの指導者、またユダの民に対してそう呼んでおられます。彼らがやっていることはソドムやゴモラと同じことだということです。ソドムやゴモラの民が、宿命的に滅び、我々、神の民は自動的に救われるのだと考えること自体が、きわめて誤っていることが分かります。

¹¹「あなたがたの多くのいけにえは、わたしにとって何になろう。——主は言われる—— わたしは、雄羊の全焼のささげ物や、肥えた家畜の脂肪に飽きた。雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。

¹² あなたがたは、わたしに会いに出て来るが、だれが、わたしの庭を踏みつけよと あなたがたに求めたのか。

主は神殿で礼拝を献げる祭司たちの奉仕を辿っておられます。祭司がいけにえを祭壇で献げます。ほふって、祭壇に血を注ぎます。この一連の行為について、主は喜んでおられない、忌み嫌うものだとされています。そして、「わたしの庭を踏みつけよ」とされていますが、これは悔っていることを示しています。同じ言い回しが、ヘブル書 10 章 29 節に出てきます。「神の御子を踏みつけ」とされています。

¹³ もう、むなしいささげ物を携えて来るな。香の煙、それはわたしの忌み嫌うもの。もう、むなしいささげ物を携えて来るな。新月の祭り、安息日、会合の召集—— わたしは、不義と、きよめの集會に耐えられない。¹⁴ あなたがたの新月の祭りや例祭を、わたしの心は憎む。それはわたしの重荷となり、それを担うのに疲れ果てた。¹⁵ あなたがたが手を伸べ広げて祈っても、わたしはあなたが

たから目をそらす。どんなに祈りを多くしても聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。

新月の祭りは、安息日、年に七回の例祭があります。これらの全てを主は憎むとまで言われています。そして疲れ果てているとまで言われています。これは、言い換えれば私たち教会が、クリスマス、イースターなど、これらが神には忌まわしいと言われているようなものです。そして、私たちは手を合わせて祈ったりします。しかし、主は聞かれません。これが衝撃的です。

なぜか？それは、自分が罪を犯しているのに、それをこれらの儀式や宗教的活動で、自分は主に喜ばれていることをしていると、罪を隠す手段にさえなっているからです。イエス様とユダヤ人のやり取りを思い出してください、イエス様は「あなたがたは真理に留まれば、自由になれるのです。」と言われたら、「私たちは奴隷になったことはありません。」と彼らは反発したのです。しかしイエス様は、「あなたがたは罪の奴隷なのです。そして子が自由にするから、自由にされます。」と言い換えられました。けれども、彼らは「私たちの父はアブラハムです。私たちはアブラハムの子なのですよ。」と反発します。アブラハムの子たちなのだから、奴隷の身ではないはずがないというのです。それで、「私たちにはひとりの父、神がいます。」と言いました。ところが、イエス様は「あなたがたの父は悪魔です。」と言われたのです。それは彼らが心の中でイエスを殺そうという殺意を抱いていたのです。心は憎しみと妬みでいっぱいだったのに、アブラハムであるとか、神であるとか、自分たちの心を見ずに、神の知識を使っています。

2C 悪の取り除き 16-17

¹⁶ 洗え。身を清めよ。わたしの目の前から、あなたがたの悪い行いを取り除け。悪事を働くのをやめよ。¹⁷ 善をなすことを習い、公正を求め、虐げる者を正し、みなしごを正しくさばき、やもめを弁護せよ。」

イザヤの一連の叱責と勧めは、ヤコブが手紙の中で書いていることと似ています。「4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。」身を清めなさい、と言っていますが、その本来の意味、悪い行いを取り除いて、悪事をやめて、二心をやめなさい。思いを一つにして、善を行いなさいということです。儀式的に、水で洗いの清めを行うだけでなく、それ以上に心を一つにしなさいということです。

具体的には、公正を求めることです。虐げる人のために救助することです。みなしごややもめを弁護することです。これらはすべて律法で強く教えられていることです。これらに立ち戻りなさいと、主は言われているのです。心の貧しい者、弱い者のために愛の行いをしなさいということです。

3C 主による清め 18-20

¹⁸「さあ、来たれ。論じ合おう。 —主は言われる— たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くて

も、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。

私たちのすることは、心を引き裂き、へりくだることですが、その心を清めるのは主ご自身です。主が聖霊の力によって私たちの心を一新してくださいます。「Iヨハ 1:9 もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」どんなことをしていても、主がこのような驚くべき、きよめのわざを行ってくださいませ。私たちが悔い改めるのであれば、聖霊が降り注がれて、全ての罪が洗い清められるのです。これほど主は、憐れみに富んだ方なのです。

¹⁹ あなたがたは、もし喜んで聞こうとするなら、この地の良い物を食べる事ができる。²⁰ しかし、もし拒んで背くなら、剣に食い尽くされる。——主の御口がそう語られる。」

喜んで聞こうとするなら、とあるように、私たちが良き知らせの言葉を聞くならば、というように、応答が必要です。そうすれば、ユダの国は、その地を主に回復していただけます。けれども、悔い改めずに頑なにしているならば、そのまま滅ぼされます。

3B 遊女になった都 21-31

次に、主はエルサレムを遊女と言われて、その罪を責められます。

1C 失われた公正と義 21-23

²¹ どうして遊女になったのか、忠実な都が。公正があふれて、義がそこに宿っていたのに。今は人殺しばかりだ。²² おまえの銀は金かすになった。おまえの良い酒も水で薄められている。²³ おまえの君主たちは強情者、盗人の仲間。みな賄賂を愛し、報酬を追い求める。みなしごを正しくさばかず、やもめの訴えも彼らには届かない。

ここでの忠実な都というのは、ダビデがエルサレムを治めていた時のことを言っています。エルサレムを一人の女に喩えておられます。雅歌の時に話したように、神が男から女を造られ、それで結婚の制度を定められたのは、ご自身と契約の民の関係を示すためでした。「忠実」と訳されていますが、これは「貞節を守る」と言い換えて良いでしょう。ただ主なる神だけを愛するという忠誠です。それがなくなると姦淫をしているのと同じになり、それで「遊女」と呼ばれています。

教会も、キリストの花嫁と呼ばれます。イエスを愛するのであれば、家族でさえも、また自分の命でさえも憎むというほどの献身であり、明け渡しです。それが生ぬるいので、吐き出すとイエス様がラオディキアの教会に対して言われましたね。けれども、銀が金かす、良い酒が水で割ったというのは、「役に立たなくなった」ということです。イエス様が言われた、塩気をなくした塩であり、地に捨てられるものになるということです。私たちが、世と同じ考えを教会にも取り入れなければい

けないとすれば、たちまち価値のないものになってしまいます。

具体的にエルサレムの都で行われていたのは、君主が強情になっている、盗人になっている。賄賂や報酬を求める。みなしごややもめのような弱い人々のために立ち上がらないといけないのに、むしろ貶めています。

2C 主による精錬 24-27

²⁴「それゆえ—万軍の主、イスラエルの力強き者である主のことば— ああ、わたしは逆らう者に思いを晴らし、わたしの敵に復讐する。²⁵ わたしは、わが手をおまえに対して向け、おまえの金かすを灰汁のように溶かし、その浮きかすをみな除く。²⁶ こうして、おまえをさばく者たちを以前のよう、おまえに助言する者たちを最初のようにする。その後、おまえは正義の町、忠実な都と呼ばれる。」²⁷ シオンは公正によって贖われ、その町の立ち返る者は義によって贖われる。

孤児ややもめなどが不正な裁判における被害者です。お金ですべて片が付くのですから、お金を持っていない人々の訴えがいつも退かれます。けれども、「万軍の主」がその人たちを擁護されます。「万軍」というのは天使の軍勢を意味しますが、軍事的意味合いを持った神の呼び名です。いかに権力を持った指導者でさえも、はるかに力を持っておられる万軍の主が今、それら捨てられた孤児ややもめのために戦ってくださいます。主は、私たちが信仰のゆえに弱くされている時、虐げる敵どもに対して戦ってくださり、公正に裁いてくださるのです。

しばしば、「おまえの金かすを灰汁のように溶かし、その浮きかすをみな除く」というような、不純物を取り除くことを、主が裁きを行われる時の言葉として使われます。これは、つまりは本物の人々は残されるのです。むしろ純化されます。そして偽物は燃やされ、焼かれてしまうのです。主は燃えつくす火として語られています。不正な者にとっては、その火は滅ぼすものですが、誠実な者にとっては、それは清められるための火であります。

そして、主は正しいさばきつかさを置いてくださいます。こうして初めのよう、エルサレムを正義の町、忠実な都としてくださいます。それは、新しく生まれたキリスト者たち、イスラエルの贖われた者たち、そして何よりも、主ご自身のことです。すべて、これは恵みによるものです。

3C 背く者の滅び 28-31

²⁸ 背く者と罪人はともに破滅し、主を捨てる者は消え失せる。²⁹ まことに、彼らは あなたがたが慕った樅の木で恥を見、あなたがたは 自ら選んだ園によって屈辱を受ける。³⁰ あなたがたは葉のしおれた樅の木のように、水のない園のようになるからだ。

ユダの民だからと言って、救いが自動的に保証されているのはありません。中には、悔い改め

ることなく悪を行ない続けており、世が減びると同じように減びることもあるのです。ここで彼らが行っているのは偶像礼拝です。榿の木の下で偶像礼拝を行ないました。選んだ園とは、そこで神ではない、異なる霊と交わり、また性的にも逸脱した行為を行っていました。その儀式の一環として不品行を行なっていました。悔い改めなければ、それらを行なっている異教徒と同じように裁かれる、ということをおっしゃっています。パウロの書簡の中に何度となく、正しくない者は神の国を受け継ぐことはない、だまされてはいけない、と言いましたね。

³¹ 強い者は麻屑に、その行いは火花になり、二つとも燃えさかり、これを消す者はいない。

主は、二つの裁きをしてくださいます。強い者を麻屑のように弱くしてください。そして、行いは火花となります。こうやって徹底的に滅ぼされます。

2章以降も、続けて主は、ユダの中で、エルサレムの中で、神を知らない者と変わらないことをしている悪や高ぶりについて裁かれるメッセージをイザヤに対して行われています。最後に、ペテロ第一 1章にある言葉を読みしたいと思います。「 I ペテ 1:17-19 また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごしなさい。ご存じのように、あなたがたが先祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない子羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」